

なる商賣をやつて居る總ての人々が、自分の職業と云ふものは此社會を構成するが爲には無くてならぬ、一の要素だ、一の分子だと考へて來ますれば、こゝに、社會に活氣あり、希望現はれて參るのであります。斯うなれば已れも愉快に、他人も愉快になる所以であります。

三

故に現代人の觀察、修養の仕方は物を縦に見る勿れ、物を横に見よ、斯う云ふ事でありませぬ。私が斯んな話をするに或る人が心配して、斯う云ふことを言つたことがあります。どうもさう云ふやうにするに、上官と下官、監督する者と監督される者との間が毀れるやうになりはせぬかと思ふ。皆上等なれば、あれも上等、是れも上等と云ふことになる。まことに可笑しなものではないか。妻君も上等、御亭主も上等。御亭主が何を云ひ付けても「あなたも上等か

も知れないが、私も上等です。そんなことを言つちや困るではありませぬか」と云ふ。又子供が親に叱られると、「お父さんも上等なら、僕も上等です。そんなことをお仰しやつても駄目です」と云つたらば、何うです。との質問でありました。ですが、それは違ふ。御亭主は御亭主、妻君は妻君、親は親、子は子であつて皆立場が違ふ。親として立派な親であり、子として立派な子であるならば、其の間にいさかひは起らない筈であります。又立派なる夫であり、立派なる妻であるならば、彼等は夫に向つて理窟を云ふ必要はない筈です。即ち皆己れの立場に徹底して、與へられたる仕事に熱中して、それを尊重して行くならば何等異なるところは無い。立派なる子であるならば子を育てるに於て立派な親でなければならぬのであります。即ち職業神聖——人格主義——物を縦に見ずして横に見よと云ふのは、總ての人に確信を抱かしめ、總ての人に己れの立場を感ぜしめる、

徹底した、新しい見方でありませぬから、世の中の風俗習慣を紊ると云ふ虞は毫もないのであります。茲に於てか、各種各様の職業や立場に確信起り、

何人に活氣出で、社會は面目を一新し、希望あり、彈力ある生活團體となるのであります。

蘇らんとする回教徒

(下)

大川 周明

信仰と政治と相結ぶこと叙上の如き回教徒が、異教徒の支配を喜ばざるは言を俟たぬ。されば前世紀に於て、歐洲列強の植民的發展が、回教徒の國土に及ぶや、常に甚しき抵抗を受けた。而して回教諸國の政治的獨立が、或は脅威せられ、或は強奪せらるゝに及んで、之に對する抵抗叛亂が、全世紀に互つて屢々繰返された。

世人の熟知する如く、回教徒は、メツカ巡禮を以て最も重要な宗教的義務の一とする。各國より遠路聖地に詣づる回教徒は、彼等が等しく不幸なる運命に襲はれたるを相語りて、憤激し、慷慨した。彼等は世界に於ける全回教國土が、漸次異教徒のために蠶食せられつゝあるを知つた。斯くの如くにして彼等は、各自の國土に於て歐洲列強の侵略と戦へるのみならず、今を距る約六十年前に於て、夙く既に今日の所謂汎回教運動の端緒を見た。而して此の

「道」第54号(1921.2)

運動の導火線となりしものは、メツカの一回教神學者によつて書かれたる亞拉比亞語の小冊子『回教を奉ずる一切の國王並に國民に告ぐ』である。

汎回教運動が、回教諸國に於て、如何なる方法によつて具體化されたか、如何なる程度まで組織的に發達したかは、到底吾等の詳知し難きところである。さり乍ら、世界戦以前に於て、既に埃及に六種、其他の諸國に約十種の機關新聞又は雜誌を有し、カイロを中心として、盛んに主義の傳道に努め、倫敦ジュネーヴ、パリ、及び北米合衆國に於て『汎回教會』を設立し、専ら回教徒の糾合に努めて居た。先年蘭東印度政廳は、汎回教運動の東印度諸嶋に傳播せんことを恐れて、嚴に該運動機關刊行物の輸入を禁止したけれど、遂に其效を奏さなかつた。

二

汎回教主義は、クロイマー卿が定義せる如く、第

は、名高き亞富汗王アブドル、ライマンの宣言、最も能く之を表明する。曰く『吾れ一言にして吾が滿腔の希望を汝等印度の回教徒に告げん。曰く、知識を得よ、知識を得よ、三度繰返して言ふ、知識を得よ。同胞よ、無智に安んずる勿れ、又己れの無智を知らずして安んずる勿れ。或は言はん、回教は近代の哲學と風する馬牛なりと。又言はん、歐洲の科學は罪惡に過ぎずと。吾れは彼等に與せず。吾れは勸む、汝等知識を得ざる可からずと。然れども科學は皮相にして、宗教は骨髓なることを忘れざれ。心情を淨めて、然る後に頭腦を鍛えよ。或は單に心情を淨むるに満足すれども、斯くの如きは未だ至らざるものなり』と。

吾等は、今より回教復興の經路を辿りて、汎回教主義の世界政策的意義を明かにし度いと思ふ。

三

一にはスルタンに對する忠誠を高調し、第二には基督教に對する抵抗戰闘の精神を力説し、第三には回教信仰の改革を主張し、如上の目的を達する爲に、世界に於ける全回教徒を一致團結せしめんとするものである。一九〇五年三月、カイロ發行の一機關新聞に掲げられたる論文は、汎回教主義者の反歐羅巴精神を、最も赤裸々に表白せるものにして、彼等が歐羅巴列強に對して、政治的並に宗教的に、激しき反感敵意を抱けることを示して居る。該論文は『印度人及び埃及人に告ぐ』と題し、筆を極めて印度及び埃及に於ける英吉利の『暴虐無道』を難じ、結ぶに下の言を以てした。曰く『一致團結するもの、能く最後の勝利を得るなり。來つて吾等と心を一にし、力を一にせよ。今は是れ壓制に呻吟する印度が、同じく暴虐に號哭する埃及と相結ぶべき秋に非ずや』と。

而して信仰上に於ける汎回教主義者の進歩的態度

回教諸國が悉く歐羅巴の前に雌伏して以來、世界は回教の戰闘的精神、曾て有せる熾々たる信仰が、既に地を拂つたと考へた。或は斯く考へることによつて安心せんとした。而も回教が、表面最も悲境に沈淪した時に、その搖籃たりし亞拉比亞の砂漠の中から、再び熱烈なる信仰の炎が燃え立つたのだ。此の回教改革者は、取りも直さずアブド・ウル・ワハブ其人であり、彼れ及び彼れの信者によつて、全回教世界が其の眠りより覺まされ初めた。此のワハブ運動によりて、實に回教の大リバイバルが起されたのである。

此のリバイバルは、總ての改革運動と等しく、政治的並に精神的の兩面を具へて居る。回教改革者の心を打てる第一の重大事件は、實に回教世界の政治的徴力であり、而して歐羅巴の侵略であつた。即ち此のリバイバルが回教諸國を震撼したのは、第十九世紀の中葉であり、而して此時代こそは、西歐諸國

がナポレオン戦争の創痕より癒えて、盛んに回教諸國の侵略を企てた時であつたのだ。かくて回教徒の精神には、精神的革新と政治的解放とが、堅固に相結んで、西歐の侵略に對抗した。

固より當時に於ける歐羅巴の物質的並に軍事的優越は、到底回教徒の敵でなかつた。されど回教の指導者は、東洋本来の憚忍を以て、いつかは吾志成る可しとの確信の下に、遠遠なる目的のために努力した。彼等の努力の結果は、何等表面に現はるることなかりしを以て、多くの歐羅巴人には判らなかつたけれど、炯眼なる少數の識者は、早くも其の歐羅巴に對する危険性を看破した。例へばW、G、ポールグレイヴの如きは、一八七二年に出版せる『東方問題論集』に於て、下の如く述べて居る。

『回教は今日と雖も、一個の巨大なる力にして、獨立自存の力に充ち、且侵略の餘力を蓄ふ。その相結べる勢力と戦ふことは、眞に恐る可きものたるを

アナアド・テムブルが言へる如く『カイロ發行の新聞が、バグダード・テララン・ペシャワールで、君府發行の新聞がバスラ・ボムベイで、カルカッタ發行の新聞がモハマラー・ケルベラー・ポートサイドに』行き亘つて居る。回教徒は基督教を侮蔑する。而も傳道の方法を彼等に學んだ。アミーン・リハニと言ふシリア生れの一基督教徒が、歐米に向つて下の如く警告して居る。曰く『回教は、歐羅巴の隣接地方に於て失へる所のものを、阿弗利加及び中央亞細亞に於て得つゝある。之を得る方法は、正しく基督教の傳道に則つたものだ。歐羅巴は、いつかは己れに叛逆せでは止まぬ回教徒を、軍人に仕立て上げて居るのだ』と。

四

次に吾等は、回教の指導者が、如何に世界政局を觀て居るかを示すために、ヤヒヤ・シツヂクの言を

失はず。東方回教諸國は、彼等の敵手西歐基督教徒の多面なる力と策略とに目覺めたり。そは當初は彼等の尊敬と恐怖とを博し、彼等の崇拜をすら贏ち得たりしも、今に於ては此事却つて彼等の喜ばざる所となり、其の憎惡を惹起するに至れり。故に回教に於ける最も熱烈なる信者は、永く歐羅巴に留まりて其の諸科學並に諸制度に關し、最も深く學得せる者の間に在り。彼等は基督教が不斷に分裂し、常に不安定の間に在るを知り、近代歐羅巴の諸制度が、最も忌む可き動搖裡に在るを知る。彼等は回教徒を以て、堅固なる磐石の上に立つ人となし、彼等の立脚地の確乎不動と、他の動搖不安とを對比して會心す』と。

回教徒は、歐羅巴人の智慧によつて征服された。而して今や其敵に學べる智慧を以て、其敵を斃すの準備に取かゝつた。彼等は歐羅巴を惡む。而も反歐の團結を固くするため、新聞を彼等に學んだ。バ

引く。彼れは佛蘭西のツールーズ大學を出でたる法學博士で、埃及の裁判所で判事を勤めて居た人だ。彼は、歐羅巴に對して下の如き批判を下して居る。『試みに問ふ、歐羅巴——即ち吾等の所謂指導者は、既に其の進化の絶頂に達したのか。歐羅巴は二百年間の過度の努力によつて、その活力を消盡したのか。換言すれば、歐羅巴は、最早老耄の域に達し、其の文化的役割を、もつと若く、もつと頑丈な、もつと健全な民に譲らねばならなくなるか。予は敢て斷言する、歐羅巴は今日を以て最高處に登りつめたのだ、其のだらしなき植民的發展は、力を示すものに非ずして弱點を示す。巨大と権力と光榮との背景を負へるに拘らず、今日の歐羅巴は、未だ曾て見ざる分裂と脆弱とに頻して居る』と。

而して歐羅巴の回教徒に與へたる影響に關して、彼は下の如く言ふ。『歐羅巴は多くの善きものと、多くの惡きものと

を東洋に與へた。善いと云ふのは物質的並に智識的意味であり、悪いと云ふのは道德的並に政治的見地からである。多年の争闘に精力盡き、眩惑的な文明に心弱り、回教諸國が衰退の域に陥つたのは已むなき次第ではある。而も彼等は斃れたのでない、死んだのでない。彼等は砲火の力によつて征服はされたが、永く歐羅巴の壓制の下に在つても、毫末も統一を失つたことがない。予は歐羅巴との接觸が、吾等にとつて、物質的並に智識的見地からは有利であつたと言つた。回教の諸君主が、力を以て其の臣民に施行せんと欲した改革は、歐羅巴との接觸によつて、百倍も遂げられた。科學・文學・藝術に於ける過去二十五年間の吾等の進歩は長足であつた。此の速度を進めば、吾等は五十年にして能く一切の文物に於て歐羅巴と比肩し得ると信ずる。

『回教紀元第十四世紀(即ち西紀第二十世紀)を以て、吾等の新時代が始まる。此の新世紀は、吾等の

復興と、吾等の偉大なる未來とを劃するであらう。新しき呼吸、一切民族の回教國民を鼓舞する。一切の回教徒は、活動と建設との必要に胸を躍らす。今や東方に於て、回教徒の間に、二十五年以前には、想到するとも出来なかつたほどの、驚く可き活動がある。』

五

自覺せる回教徒が、白人の支配を激悲し呪咀しつゝあることは、疑ふべくもなき事實である。而して彼等が復興の日に備へつゝあることも事實である。されど此の準備は、極めて憶密の間に行はるゝが故に、外よりの察知は至難である。セヌツシ教團を初め、回教内に結社されて居る大小幾多の教團は、教訓、鍛鍊、改宗と云ふ精神的武器を以て、不斷に戦ひを續けて居る。彼等は回教を白人の政治的支配より解放する爲には、先づ信者の精神的革新を行ひ、

之によつて解放戦並に戦後の建設に必要な眞個の「力」を養はねばならぬことを知つて居る。彼等は歐羅巴の力と、彼等自身の弱點とを知悉するが故に尙早なる輕舉妄動の危険を知る。彼等は機運の次第に動きつゝあるを確信し乍ら、徐々に、冷静に、沈着に、偉大なる力を蓄へ、驚くべき自制を以て、時到期らざるに事を舉げんとする一切の誘惑を抑止して居る。故に反歐精神が爾く強烈を加へて來たに拘はらず、過去二十年間の甚だしき壓迫に對して、唯だ面的反抗を見るに過ぎなかつた所以であり、且世界戦に於て土耳其の『神聖戦』に参加しなかつた所以でもある。

六

千九百十四年、土耳其が同盟國側に參戰するや、全回教徒に向つて『神聖戦』に参加せよとの宣布を發した。此の宣布は、獨塊側の期待せる如き効能は無

かつたけれど、さりとて聯合國側が吹聴せる如く全然無効のものでもなかつた。事實此の宣布ありしために、聯合國治下の回教地方には、到る處に多かれ少なかれ騒動が行はれた。埃及にも可成り大規模の叛亂が起り、英國守備軍の武力を以て辛うじて之を鎮壓した。トリポリにも暴動が起つて、伊太利守備隊を沿岸地方に追ひ立てた。波斯でも大事に至らんとしたが、露國軍隊で激しく抑止した。印度西北境に於ても常に騒動が絶えなかつた。

されど此等の騒動は、夫々の間に何等の連絡がなかつた爲に、大局の上から言へば大なる力とならなかつた。それは各國の回教指導者が、時未だ到らずと信じたからである。

然るに平和會議に於ける對土耳其の態度は、全世界の回教徒をして今更の如く激昂せしめた。而して埃及並に波斯に對する英吉利の態度、メソポタミヤに於ける佛蘭西の態度は、實に全回教徒に對して挑

戦状を叩きつけたやうなものである。故に回教徒は到る處に反歐羅巴的行動に出で、且相互の間に連絡協力を見んとするに至つた。加ふるに赤露政府が、英佛に對する戦略として、あらゆる手段を講じて彼

ヤツプ島所見

小栗盛太郎

昨秋來海底電信のことで亞米利加あたりで八釜しく謂ふて居るヤツプ島はカロリン群島の西部に屬し東經百三十度同百四十度の中間に位し北緯十度に接近せる十三平方里の島である。住民は大正九年三月現在では他の離島を併せ島民八千五百三十七人にして男女半半して居る。外に邦人男六十七名女九名計七十六名である。私は昨年夏七月此島を旅行したが島民の生活及風習等は餘程他の視察した諸群島に

比較して異つた點がある様であるからざつと述べて見やうと思ふ。
一體に南洋群島は熱帶圈内(氣温最低七十三度最高)に在るから其住民は大自然の恩恵に浴し生活上に頓と何等の不安もなく又何等の慾望がない。故に極めて懶惰である。即ち裸で一年を通ほすことが出來、掘立小屋で而も土間のみに起臥することが出來、天然野生の植物により充分に腹を満たすことが出来るか

ら時あれば謠ひ折あれば踊り唯一の年中行事は男女の關係にあるのである。而してヤツプの土人も此懶惰癖存するのみならず群島中却て首位を占めて居るとのことである。今生活の状態に付て概説して見やう。

衣服。南洋群島は往時は男女を問はず概して裸體跣足であつたが漸次外國人に接觸し且つ基督教の教化により着衣穿靴の者が漸く増加したるもヤツプ島だけは男女共全部依然として裸體である。唯女子は植物の葉を厚く重ね連ねたる長さ尺餘の腰篋を腰部に纏ひ男子は植物の纖維を以て編み又は織りたる褌を用ふ。近來は外國輸入の種々色彩ある木綿を取交ぜ使用して居るを見受けた。寢具は殆ど無い。有りといへば唯植物で編んだ莫莖位のものである。彼等は寢る時には此莫莖を一枚下に敷き別に一枚を上には掛ける位である。然し近來は南京米を入れた麻の袋又は木綿類を以て掛蒲團に代用し又金巾類の蚊帳を

使用するものもあるがこれは極めて少數であるといいた。衣服にあらざるも身體の裝飾に付て一言すれば、文身、耳環、腕環、頸飾等各群島に於て形は區々なれども概して行はれて居る。併しながら頭髮の裝飾は全くヤツプ島は異つて居る。マリアナ、マーシャル、東部カロリン諸群島の土人は頭髮に椰子油を塗つて居る、尤も此等の土人中女子は總て髪を束髮状に結ふて居るが男子は斬髮者が多い。之に反して西部カロリン群島中のヤツプ、パラオの土人は等しく結髮し各々階級に應じて長さ尺餘の扇子の骨状を爲した櫛類を用ゐて居るが椰子油は一切使用しない。尤も婦人は月經期迄は斬髮して居る併し男子も此外椰子油だけを全身に塗る習俗がある。これは彩身の爲めよりは寧ろ強烈なる臭氣を以て蚊群の襲撃を防ぐが爲めの用意なりと聞いて居る。
私はマリアナ、マーシャル、東部カロリン群島を旅行中一人の禿頭者にも白頭者にも出會はなかつた